

武 皇 帝
脩 封 禪



武

右払いをしつかり重く書きましょう。少し重さが不足して居るようですがしつかりと。

皇

白の縦画を、背勢で内側に引き締めると特徴がとれますね。王の横画三本目の間が空いてますが少し少なかったようです。横画を長く。

帝

二画目の横画が長く八分をつけてしつかり書きましょう。最終画の縦画少し長いようです。

脩

もう少し横に広く見えるように、少し小さくになりました。

封

偏は右上がり、寸の横画は八分を入れてバランスをとり、縦画は前の行の「時」の字を参考にして(表紙裏)書きましょう。

禪

旁は、見えにくく、欠損しているところですが、他の文字を見て、横画の八分も書き入れましょう。



然

上部の右の「犬」は「火」となっている。この「火」の三画めの縦画、垂直に下してから、左へ折れるように出している。最終画の点も、同じ方向にならないように書いてます。

則

細く伸びやかな線で、かなり細いが、スケールの大きな字となっている。傍の「亅」は、強靱な線であり、ゆっくりと書いて下さい。

大

起筆は突く感じの藏鋒で、長く書いて下さい。左への払いが大きく運筆して下さい。

教

自然に筆を運んで、行書の筆意で書いて下さい。あまり速書きにならないよう、リズムを大切に書いて下さい。

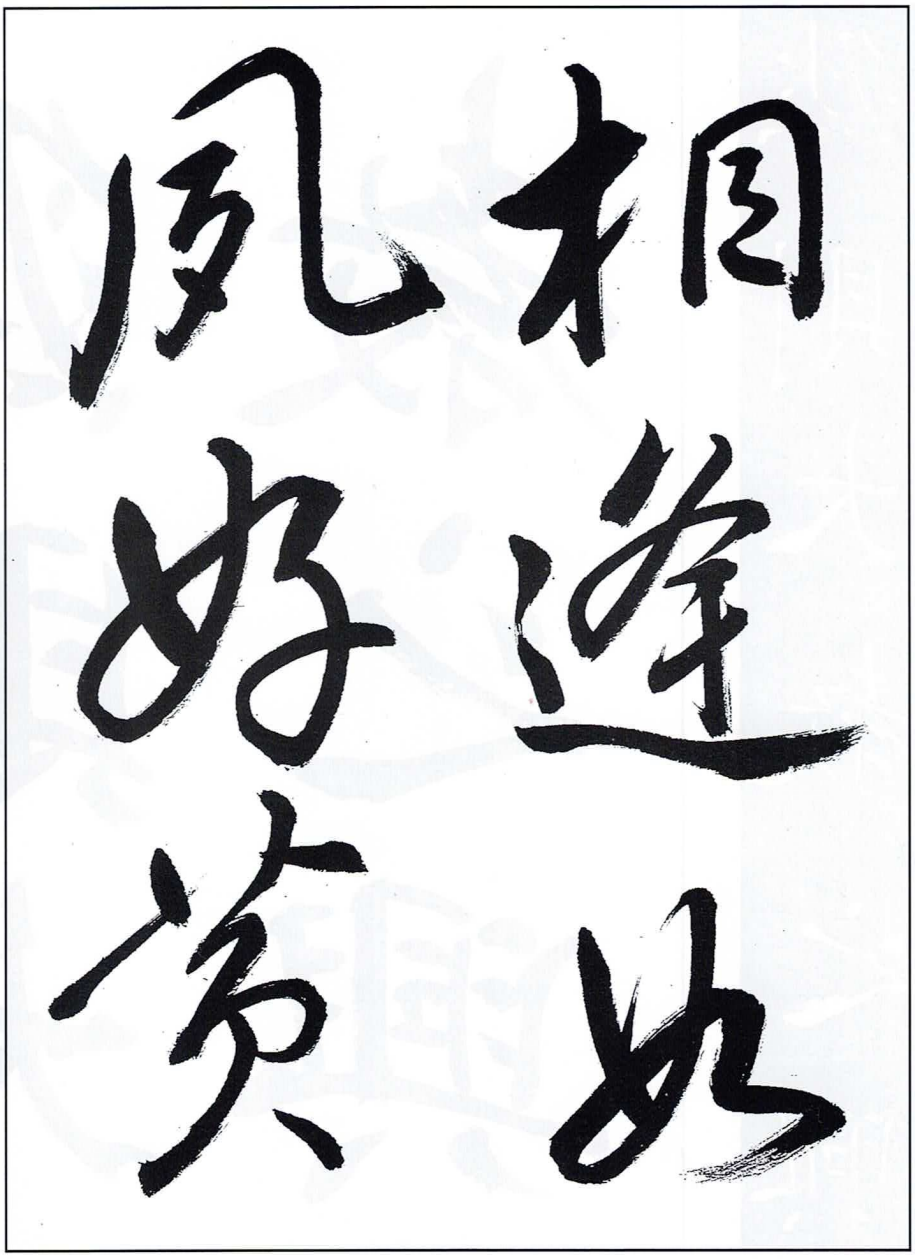
之

画数の少ないものは、他に比べて太くなっている。最終画皆様はもう少し太く力強く書いて下さい。

興

伸びやかな横画は、途中で消えてるように見えますが、私は藏鋒で入り、あまり細くならないよう書いています。

小田原翠浦書



董其昌が書き残した書論「画禅室随筆」がある。第五十二則までであるという。

第四則に：須らく懸腕なるべし……
第五則に：須らく直なるべし……

その腕を廻らして筆を運び鋒尖を立て直し、躍動させること、と解説あり

相 一画目、墨量多く、三本の縦画は、懸腕で書きましよう。

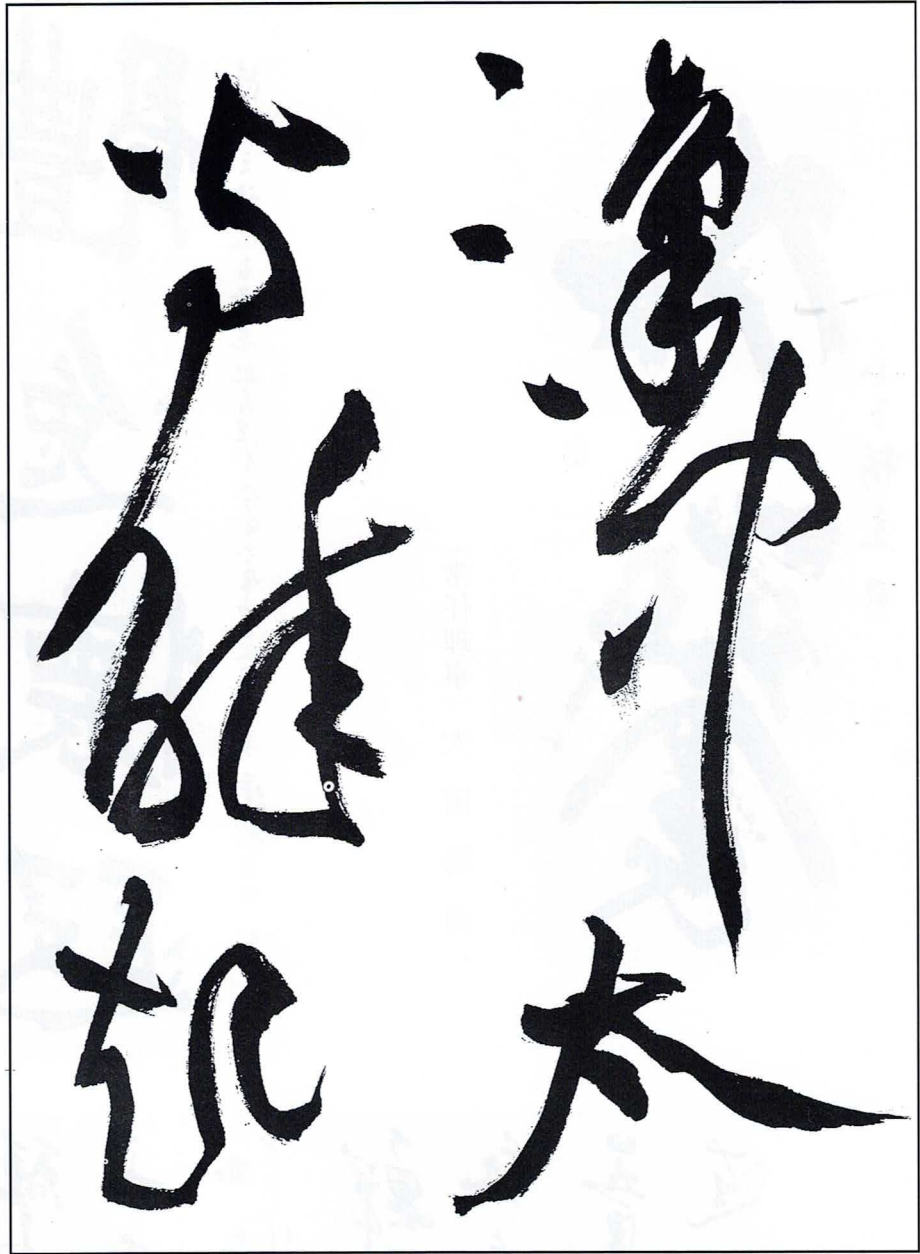
逢 やはり懸腕で、最後はゆったりと。

如 最後まで、筆管を立て、肘が下がらないよう。

風 一画目ゆったりと書き、二画目に気持ちだが、途切れぬよう。

好 扁から旁へいく時も、肘は下がらない。

黄 最後の二画目、左に振り切ってしまうわないで、最後の点まで気持ちが続いている。



今月は、原帖から窺えるように全体的に行の中心線の移動、文字の大小の調和、扁と旁の間の空間、連綿等見られます。これらの流れに留意して学びましょう。

(漢中の太守、酔いて起って・・・舞う)

漢 偏のサンズイ、大胆に大きく、旁の部多筆なので、扁と旁の間の空間に留意して。

中 上部ゆとりの空間、中心線右寄り、斜め一気に見せ所。

太 右払い線、揺らぎで伸び伸びと。終筆中心に。

守 小さくまとめ次に。

醉 扁、前の字(守)からの連綿のを受けて伸びやかに。旁への斜線、右上がり、扇が開くようにして、終筆は右下がり収め落ち着かせる。空間の取り方。

起 左寄りで小さい。半紙許容範囲の位置で左寄り。原帖、行末部、心憎い終筆。